令和 7 年1月 19 日

第 2 回非常通信ボランティア研修会に参加して

佐々木　朗　JH8CBH

1　消防見学はできるかどうか

JARL 渡島檜山支部では、非常通信ボランティアを組織し、万が一の災害に備え、伝達訓練を行ったり、研修会を行ったりしています。本年度は、第 1 回目が防災フェスタの見学でした。2 回目は、机上の研修会と思っていたのですが、実際の見学を通して学ぶのも意義があると考え、消防や警察などを考えてみました。支部の総務幹事が消防に勤めていることもあり、話をうまく運んで下さり、今回の研修会が実現しました。

2　指令室の見学

1月 19 日（日）、折しもこの日は、119 番の日になりますが、特にイベントなどは入っておらず、職員さんにゆっくりと対応していただくことができました。今日は、比較的気温が高く、小雨の降るあいにくの空模様でしたが、支部非常通信ボランティア 10 名が研修に参加しました。

通信指令室は、本部の4階にあります。個人情報保護の観点から、私たちは、指令室の後ろにあるホールからのガラス越しの見学となりました。

私は初めての見学でしたが、思ったよりこぢんまりとしていました。テレビとかでは、何十人も詰めて巨大なディスプレーがあってという感じがイメージとしてあったためです。その様子が写真の通りで、常時 6 名が勤務しているそうです。指令室の正面には、消防車両の状況、出動、待機、巡視などが一目でわかるようになっています。また、函館市の地図には、消防車両の現在位置がプロットされ、帰署途中に最寄りであれば、新たな指令を出すこともできるということです。その右（写真で言うと奥）には、NHK テレビが映っています。災害をいち早く知るためです。そして、電話の回線情報が表示されています。函館地方の現在の気象情報も表示されていました。

その日のスタッフは、若い職員ばかりでした。この方たちが函館の安全を守る最前線にいるんだなあと感心しました。

最近函館市消防本部の通信システムが更新され、最新のものになっているとのことでした。もちろん無停電装置につながっています。

通信は、必ず二人で受けるということでした。場所の取り違えは重大事故に発展しますので、特に複数で注意深く聞くそうです。また大災害が発生すると、職員を増員して、対応できるようになっているということでした。

この日も救急車4台が出動中で、地図には4つのプロットで表示されていました。

同時に火災が発生することはめったにないそうですが、昨年、二件の火災が重なった時があったそうで、隊を振り分けて対応したそうです。また、火災時には一斉に 119 番が集中することから、回線数を絞って対応しているそうで、そうしないと、同じ通報で、回線が満杯になってしまうそうです。

また、それ以上の火災が同時発生した場合は、やりくりはするそうですが、対応は難しいであろうということでした。乾燥時、強風時などは、特に個人個人が十分気を付けなければならないことを自覚しました。

救急の通報では、せっぱ詰まった声を聞くことも多いようです。テレビなどでは、指令員が人工呼吸の仕方を救急車到着まで指導している場面もありますが、実際の現場では、「とにかく早く来て。」を繰り返すばかりで、人はパニックになると、なかなか冷静に戻れないということも話して下さいました。

その他、職員は、常に冷静に対応しているとのことですが、罵声を浴びせられるということも珍しくないようで、心労も多いのだろうなあと思いました。

北海道の多くの地域に及ぶような大災害があった場合などは、別途知事部局などから連絡が入り、函館市消防本部としても応援を受けたり、また、応援に駆け付けたりなどの特別な対応もあるそうです。

火災発生の通報が入ると、すぐに予備指令が出され、状況を把握して、出動指令を出すそうです。ですから、通報の受信中にも、出動しているということです。消防車への移動ですが、現在はり棒のようなものは安全上使われず、階段で、2階から降りて車両へ向かうそうです。

職員採用ですが、子どもたちのなりたい職業としての消防士は、常にベストテンには入っているのですが、実際はどうなのか聞いてみました。以前は競争率が 40 倍ぐらいあったのですが、最近は、2倍程度だそうです。また、「火災を消して、正義のためにがんばる。」として入って来ても、訓練のきつさや、地味なパンフレットを持っての地域周りなどで、去ってしまうという現実もあるそうです。

五稜郭タワーの最上部には、2台の高性能カメラが設置され、火災通報を受けると、自動的に向きや倍率が制御され、遠隔監視できるそうです。タワーから、消防本部の窓ガラスを通して中の様子が見えるそうですから、かなりの精度ですね。それまでは、第 1 到着車両から状況が入って、増車などを決めていたそうですが、カメラが設置されてからは、消防車両が到着前に火災の状況を的確に把握することができるようになったそうです。

隣接地域との連携も十分とられており、函館市と北斗市、函館市と鹿部町の境目などは、消防車両が出向くことになっているということです。また、通信においても、共通波で、直接連絡を取ることもできます。また、消防本部でも隣接の無線を常に傍受し、備えているそうです。

119 番の体験もしました。その時は、119 番通報がなく、職員が対応できるということで、体験することができました。スマホで、119 番をしました。すると、ガラス越しに目の前の受令台のランプが着き、職員が、「火事ですか、救急ですか。」と対応ました。通報想定文にしたがって、無事通報訓練を行うことができました。その時に、驚いたのが、職員が電話を受けた瞬間にディスプレーに、消防本部付近の地図が映し出され、自分たちのいる位置に、プロットが付いたことです。ケータイ電話からの通報では、一番精度が高い時で半径3メートルまでに絞れることができるそうです。GPS 機能をオンにしておけば(多くのスマホはオンになっていると思います)瞬時に発信元の現在地はわかるということでした。では、固定電話はどうでしょうか。これも、各通信会社のデータベースと結びついており、瞬時に発信元の住所が表示されるそうです。ただし、同じ住居表示の家がいくつかある地域では確認作業が必要だということでした。いずれにしても、慌てて近くにある建物名称を探したり、地番を探したりなどの必要性は低いようです。

通報に関わり、途中で切れた、無言のまま、などに対しては、消防は最悪の場合を想定した対応を取るそうです。連絡が付かない場合などは、消防車両を出動させて、安全を確認する作業を行うそうです。ですから、まちがって、119 番をかけたときは、「間違いました。」と一言伝えることが大切だということもわかりました。

3 消防車両の見学

最初に見たのは水難救助者。海や川、湖などの事故で出動します。

車の後ろの扉を開けると、右側には潜水服、左側には空気ボンベが積んでありました。また、屋根には6人乗りボートが積んであり、岸から離れたところでは、船外機を付けたボートが向かい、そこから救助にかかるということでした。マイナス7度の海までは入るということで、聞いただけでたいへんだなあと思いました。作業は必ず二人一組で行い、お互いの体は、

ロープで結ばれて作業するそうです。

車両が海に落ちた場合などは、この車両が出動します。空気ボンベは約 40 分潜り続けるだけの空気は入っているそうですが、継続した作業が必要な場合は、余裕を持って交換するとのことでした。

夏はウェットスーツで、幾分体を動かしやすいそうですが、冬の装備は、服も厚く動きも夏に比べると取りづらいそうです。

隊員さんの話によると、水難救助の訓練は、実際の現場で体験する救助作業よりもかなりきつい訓練を受けているそうです。また、この仕事でつらかったのは、海で事故に遭った方の体が最後まで見つからず、ご家族の方の悲痛な表情を見た時だということも話してくださいました。

最後はレスキュー車。2 台あるうちの高度レスキュー車を見学しました。オレンジ色の制服がその証です。レスキューとは人命救助。火災発生時には、その大小に関わらず、必ず出動するそうです。救助は、火災から、また、車両事故などもありますが、その他にも様々な救助があるそうです。したがって、救助のために使う道具も様々なものが想定され、最大限のものをいつでも積んで現場に向かいます。カッター、スプレッダー、チェーンソー、ロープ、ウィンチ、また、高度救助隊として、細かいところに入っていけるカメラ（胃カメラのような感じ）なども積んでいるそうです。

どのような方法で、救助を進めるかは、現場に着くまでの情報などで、打ち合わせをするそうですが、実際の現場を見て、即座に判断して、救助活動を行うそうです。

昨年、下海岸で起こったバスと乗用車の正面衝突でも、レスキュー隊が出動し、ドアをこじ開け、車内に空間を作り、そして、要救助者を車外に搬出したそうです。

かなり、ハードな職務ですので、若いということも要素としては大切だということで、2，3 年しっかり訓練を受けて、第一線に出るそうです。また、10 年から 15 年で別の部署へのローテーションなどをしていくそうです。

次々と、淡々と器具の説明をしてくださる職員ですが、その職務の大変さと、仕事への誇りを感じる車両見学でした。

3 感想

消防見学は、現役の頃は、ほぼ毎年行っていました。消防車に乗ったり、放水をしてみたり、消防服を着てみたり、それだけでも、消防の仕事の大変さを十分わかるものでした。

今回のような大人向けの消防の見学は、初めてであり、消防の仕事の大切さを改めて感じ、とても良い機会になりました。

消防見学を思い立った大きな理由は、危機管理への意識化です。私たち一般市民が、命と向き合う機会には、めったに出合うことがありません。また、災害現

場での対応も経験することがほとんどありません。

私たちは、支部としての非常通信ボランティアを組織しました。万が一の災害時にアマチュア無線の持つ有効性を生かして、災害発生時に、人の命を守る、人の生活や秩序を守るなどを目的としています。しかし、そのような状況に巡り合うことはめったにない、また、もっと言えば、一生に一度もないかもしれないということで、危機意識が薄れていることもあります。だからゆえ、いざという時に、動きを取れることが大切です。そのためには、普段から、何を用意しておくか、何を心掛けておくか、災害が起こって、いざアマチュア無線の出番だという時に何をすればいいのかを、訓練しておくことが大切であります。

そのような点から考えても、今回の消防見学は、備えの意識の向上については、多くのことを学ぶことができました。また、行動は必ず複数で行い、間違いをなくすこと、使うものはいつでも次にすぐに使えるように準備すること、そして、チームとして行動することの大切さを学びました。

私たちも日頃から、電池があるか、予備電池はあるか、電波は正常に飛ぶか、アンテナは、どうか。また、発電機やバッテリーは大丈夫か、などの点検をしておくことが大切だということがわかりました。

そして、災害が発生した時、「私にはアマチュア無線で、人のために役立てることがあるかもしれない。」という意識を持つことも大切だと思いました。

今回の研修に協力いただいた函館市消防本部職員の皆様、企画してくれた支部総務幹事には心より感謝申し上げます。